



田
地
文
子

本
の
な
か
の
歳
月

新
潮
社
版

本のなかの歳月ほんのなかのさいげつ

昭和五十年九月二十五日 印刷
昭和五十年九月三十日 発行

定価 九八〇円

著者 円地文子えんちぶんこ

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

〒102 東京都新宿区矢来町七一
電話 業務部 東京 03 三六二一五三二

編集部 東京 03 三六二一五三二
振替 東京 四一八〇八番

印刷所 塚田印刷株式会社
製本所 神田 加藤製本

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小
社通信係宛御送付下さい。送料小
社負担にてお取替えいたします。

本のなかの歳月・目次

I

私の読書遍歴	11
座右の書	13
私の第一戯曲集	14
築地小劇場付近 忘れえぬこと	16 18
谷中清水町の坂	20
物語の書出し	22
物語と短篇	23
作品の背景	29
私のなかの月	31
私と歌舞伎	33
墨染讀	42

若い頃に見た絵 45

古典と私 47

谷崎潤一郎賞を受けて 52

小説の題名 57

『嵐が丘』について 60

ドストエフスキーと私 63

Ⅱ

女の書く男 69

光源氏と六条の院 73

源氏物語出版後あれこれ 77

源氏物語の絵合 79

源氏物語の花散里 83

和泉式部など 90

「あらがね」としての今昔 92

建礼門院右京大夫のこと 93

『曾我物語』の母 96

義経と二人の女 99

俳句と連句 102

八犬伝の代筆者 105

江戸後期の文学 108

Ⅲ

詩人の肖像

与謝野鉄幹と与謝野晶子 113

吉井勇 119

『不如帰』の主題 123

女流作家の見た『大菩薩峠』 129

谷崎文学の再読 132

谷崎先生の詩 147

谷崎文学の女性像

『細雪』と『源氏物語』の玉鬘

149

『盲目物語』の形式 151

菊池寛氏の現代劇 153

正宗白鳥先生と野上弥生子夫人

155

正宗先生・軽井沢のことなど

156

岡本かの子の作品 159

林芙美子と平林たい子の作品 164

平林たい子の『愛情旅行』について 166

平林たい子断想 171

『作家のとじ糸』 174

平林たい子追悼 I 177

平林たい子追悼 II 184

平林さんの偉かさ

191

三島由紀夫の死

193

三島由紀夫の戯曲

198

三島由紀夫の思い出

200

『舞姫』について

203

オスローの川端さん

205

川端さんの死

207

『日本の美のこころ』について

211

尾崎一雄さん

216

吉川幸次郎博士についての私記

225

塚本憲甫先生追憶

228

ことばという器

234

言葉の響き

237

男言葉と女言葉

240

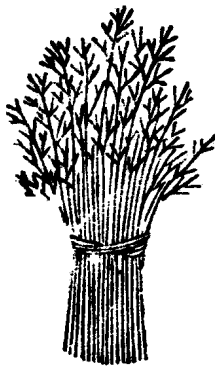
あとがき

243

本のなかの歲月

箱及び本文カット
元禄版訓蒙図彙より

I



私の読書遍歴

私の父は言語学系統の国語学者であったから、厳密な意味では国文学者ではないのである。しかしそういう縁近い仕事をしていたから、自然家には国文学の本が多かった。私のもの心ついたころから、父の書齋から二階の廊下一ぱいは本で埋っていた。洋書も翻訳書も可成り多かった。私の読書は小学校へゆく前からこの父の書齋の内外を遊び歩いている中にはじまったので、鞆つきや縄とびと同じぐらいのたのしさで、小さい自分を本の中に遊ばせていたのである。

「太陽」とか「中央公論」とか「婦女界」とか「少女画報」とか「講談倶楽部」とか「面白倶楽部」とか後に考えてみると実に種々雑多な雑誌が寄贈されて来ていた。それは大てい、茶の間や寝室にほうり出されているので私は面白そうなものは何でも読みかじった。子供の読物も大人の読物も、ほんとうの文学書も通俗小説も味噌くそ一掴みによんだ。父は私の読書について一向干渉しなかったから、本の中に悪いことが書かれているという概念は私にははじめからなく、ひどくスムーズに物語の中へ溶けこんで行った。

父の母——私の祖母が馬琴や種彦の愛読者で、幼いときから私に稗史小説の物語をしてくれたのも私の小説をよむ素因の一つになっていると思う。私には、小説とか物語とかは、現在私小説

と呼ばれている生の生活の文学化を意味しないで、自分達の生きている世界とは全く別の「絵空事」の世界に思われた。谷崎潤一郎氏の作品を早くから愛読するようになったのも、その物語的要素の豊かさにひきつけられたのであった。

しかし、小学校時代のこういう自然発生的な読書法は、思春期以後、十九世期のロシアやフランスの小説や戯曲をよむようになった時に根をゆすぶられる思いがした。トルストイやドストイェフスキーの中にある人間の生き方に対する執拗な愛情、バルザックやモーパッサンの作品にみる人間の心理、生理への深いメス——ともかく、文学は人間の生の生活と関係のないどころではなく生活を解明する鍵に思われて来たのであった。勿論、私の中の唯美主義の傾向はこの間にもオスカー・ワイルドやエドガー・アラン・ポーを愛読させたり、永井荷風の『監獄署の裏』や、『歓楽』、『雨瀟々』などに熱中させたりした。嗜みから言えば質量ともに厖大なロシア文学よりも、智的に圧搾されたフランスの作家のものが好きであった。

この時代に、私のおちいったジレンマは子供の時からよみつづけて、殆ど血肉になっている国文学の「物語性」を、意識的に自分の外へ追出そうと、無理な努力をつづけたことであった。

私はイギリス人の女の宣教師に聖書を習うのと一緒に日本人の家庭教師から英語の詩やギッシングの『プライベート・ペーパー』、ベーターの『ルネッサンス』などを習った。英語は語学としてはものにならなかったが、私の文章に国文学以外の調子を与えてくれるのに手伝いになったと思っている。シェリーやキーツ、ウォズワース、ロゼッチなどの詩は今でも、『万葉』や『新古今』の和歌と一所に折々唇に浮んで来る。前者は青春のころ努力して身につけたものの、後者は自然発生的に覚えてしまったものであるが、二、三十年を経た現在ではいずれも劣らず私にとっ

てなつかしい詩になってしまった。

△昭和30年8月1日 日本読書新聞△

座右の書

座右にも座右にも、この数年置いている本と言えば源氏物語ばかりであった。今、私がこんなことを書くのは厭味たらしくて、自分ながらキザだけれども、他の愛読書例えば方丈記とか雨月物語、春雨物語なども、折り折り出して来て読んではいるものの、源氏を手から離さないのとは、お話にならないほど違っている。

それはもちろんこの五年間、源氏が私の仕事になっていたからではあるが、それだけ本文に深入りして、よめば読むほど面白く、昔はどうしてあんな浅はかな読み方をしていたのであらうと思ったりしている。

もう一つ、この二、三年の間に、愛読書になったのはドストエフスキーの『カラマゾフの兄弟』である。「今ごろになって」と笑わば笑え。私は六十を越して、はじめて、ドストエフスキーが私なりにのみ込めるようになった。偉大な作家というものは、作曲家が音で語りかけるのに比べれば、はなはだ不自由なコミュニケーションの手段である言語を使って、他に語りかけて来るのであるが、言語の国際性の壁など突き破って、最後に残るのは作家の言葉——ロゴスであるということ。この小説は私に教えてくれた。言語を通して『カラマゾフの兄弟』は生まれたが、これは、ド

ストエフスキー以外にはあり得ない言葉の世界であり、思想である。十九世紀のロシアにおける聖書への答えとも言えるであろう。

何度よんでも飽きないし、新しい糧をめぐんでくれる。これも私の座右の書である。

（昭和48年1月14日 日本経済新聞）

私の第一戯曲集

今、若い人と話していると、私が昔、戯曲を書いていたことなど知らない人が多い。それはそれで結構なので、戯曲は結局私がものを書き始める時の、最初の立場^{たてば}だったわけである。後に小説を書くようになった人で、出発が詩や歌だった人と、戯曲だった人と二通りある。林芙美子や室生犀星は前者で、岸田国士や、獅子文六氏などは後者である。私は戯曲を書いたことで、対話のこづは今でも身についていると思っているが、文章には今だにコンプレックスがあつて、運びに苦労する。

この『惜春』という戯曲集は裏をめくってみると、昭和十年四月五日発行になっていて、版元は岩波書店である。昭和十年といえば、私は結婚して、娘を生み家庭生活の壁に頭をぶっつけてあがいていた時代で、時々新潮に戯曲をのせて貰えるぐらいでさっぱりぱっとしなかった。だから勿論、この戯曲集が処女出版されたのは、私の仕事を岩波書店が買ったからではなくて、この話を、岩波茂雄さんに持込んで下さった寺田寅彦博士のおかげだったわけである。